十年の歩みこそ實に我が東洋學界の支那神話說話研究の歩みそのものであつたのであり、そこに先達としての氏の仕事の尊さがあるからである。然し乍ら支那の神話說話研究は、西歐や日本に於けるそれらの研究に刺激せられて漸く緒についたばかりで正にこれからである。さうして此の方面の研究に進まんとする者は今日まで多少とも氏の此等の論文のお蔭を被らないものは無かつたであらうし、又將來とも常に新らしく幾多の人々によつて讀まれることであらう。殊に序に於て津田博士も述べて居らるゝ如く著者がその論文に用ゐられた史料は、文獻上の記載はもとより繪畫や彫刻の遺物までも色々の材料から苦心して蒐集せられたものであるから、此の方面の研究に從ふ者に大きい價値があり、その努力に對しては敬服の外はない。例せば卷首に掲げられた十一圖三十六個の寫眞の如きいづれも研究の好資料たるを失はぬ。今、氏の多くの論文が一册に纏められて公刊されたことは如上の諸々の意味に於て意義あることと言はねばならぬ。（A5判・本文七五五頁、索引十六頁、圖版六葉、昭和十八年十一月、中央公論社發行、賣價九圓四拾八錢）（江蟠眞一郎）

附記　著者には外に「支那上代思想史研究」（藤井書店）、「日本精神」（大觀堂）、「支那近世史研究」（大觀堂）が氏の歿後その門弟達によつて續々公刊せられてゐるのは氏の人格を偲ばしめるものであり、又「東洋學研究第一」（藤井書店）には著者の詳しい年譜及び著作目錄が掲載せられてゐる。これらを併せ讀まれるならば二層とその學問、風格を理解するに便であらう。

支那儒道佛交涉史

久保田量遠著

昭和十八年二月　大東出版社發行
三　四　一一頁　定價貳圓八拾錢

著者は大正大學の教授、十數年來三教交涉史に關係され種々の論文も著されてゐる。前に昭和六年に「支那儒道佛三教史論」を著述され名著の名を得られたが、この度は之に改訂を加へ新に大東亞名著選の一册として世に送られたものである。顧るに支那民族性を把握する上にこの上なき道教關係方面が、之まで稍ゝ閑却されてゐた事は人も知る通りである。概說書も妻木直良氏・小柳・常盤・幸田・各博士等により相當に作られてはゐるが、既に一昔以前の作品であり、未開拓の分野に手を入れて大摑みに概說されたものである。近時道教及び三教交涉史も遲ればせながら幾分進展を見せてゐるから、之等を材料として系統立てた相當な通史が出ても良い時期でないかと思ふ。先に出た興亞宗教叢書の「道教の實態」も之が功を幾分收めてゐると言へやう。故に自分もこの本を斯かる期待を以て、朱讀なるを幸として紹介させて載いたのである。然し該著は書肆の求めに應じて急遽作られたものと見え、昭和六年の前著に些か新說を加へられたに過ぎず、却つて例文や出典の記載を省いて、六百六十頁を三百四十頁に減頁されてゐる。されば紹介批評する場

合、昭和六年の作品を今日のレベルで批評する樣な事となり、隨分失禮の言も多からうと思ふが寬容され度い。

本書は後漢楚王英の佛老併祀問題より明代の三敎關係に至る複雜極まりなき三敎交涉史上の問題を、大體時代を區切つて平易に丁寧に、且つ豐富な資料を美事にこなし、手際よく纏められてゐるので、非常に讀み心地が良く、初學者、門外者の良き指導書と言へる。特に支那民族の佛敎に對する態度が最も良く取扱はれてゐる事、難解な三敎關係の資料を逐一邦譯されてゐる事、大體時代毎に三敎關係が纏めて書かれてゐるので一讀その時代の三者の外的勢力の優劣が把握出來る事とが本書を引き立てゝゐる。

然し缺點も相當見出せる。主なものを拾つて見ると、餘り三敎交涉事件の表面に現れた箇々の問題に重點を置いて說明してゐる爲、三敎各々の時代的內容とその內容の交互の交涉がさつぱり說明されてゐない。言ふまでもなく三敎の交涉は本書の如き表面的なものばかりでなく、敎理に敎團組織に凡ゆる方面に行はれたものであつて、三張の宗敎組織、陶弘景の敎理はおろか道敎の影響なくしては宗敎としてなり立たない。外面な交涉は却つてそれ等の現れで、內部の狀態に從つて變化して行く。（粗末な例だが化胡經と夷夏論とは同じ道敎側から出た對佛敎論でありながら一方は後漢來の內容なき道敎、一方は佛敎の影響で充實した道敎、から出てゐる爲に論點に大きな差がある。故に夷夏論を通して當時の道敎の佛的影響の狀態や內容を知る事こそ必要事であるまいか。）されば斯く內面的交涉を見てこそ支那民族性の把握も出來、意義も生じる。三敎の外的交涉も內容上に及ぼす影響を見てこそ價値がある。本書が幾分空虛なものに感じられるのもこの爲であらう。勿論斯かる方面を見極める事は今日の道敎研究を以てしては不可能事かも知れぬが、近來內面的研究も幾分進められ、又之を伺ふ事の出來る道藏その他も出版されてゐるから、些か努力を拂はれたかつた。

次に近頃宗敎研究は政治的社會的經濟的民族的方面からもなされねばならぬ事が叫ばれてゐる。特に該書は種々の事件を取扱つて居り、その原因探求こそ重要な位置を占む可きであり、その探求こそ以上の諸方面からなされねばならぬ。該書は概して言ふと斯かる方面からの探求が疎かにされてゐるのみか全く原因探求の努力を拂はれてゐない所も所所見受けられる。二三例を擧ぐれば金代の全眞敎が隆盛を來したのは禪の盛行から佛敎內に離敎流遁の風を生じて沈佛敎の沈滯を來し、道敎に乘じ易からしめた事と道敎が宋學と禪を取り入れ面目を一新した爲だとされてゐる（十六章・十八章）が、も一歩深く考へると、北宋崩壞し金の南下と言ふ社會的大變動の中にあつて不安にをびえ民族意識を燃やしつゝあつた漢民族の中に新道敎が立てられたと言ふ社會的原因と（支那佛敎史學四ノ一野上俊靜氏全眞敎發生の一考察參照）邱長春が成吉思汗の漢人統治政策に取り入つた政治的原因が全眞敎を盛ならしめた事を忘れてはならぬ。元長になるので省くが魏武の廢佛も斯かる政治的社會的民族的事

情があつた事は勿論である。（支那佛教史所收塚本善隆氏北魏武帝の廢佛毀釋及び東亜論叢五板野長八氏道教成立の過程參照）

更に著者は隋代佛教興隆の原因について僅かに「隋の天下を統一する事によつて漸く復興の氣滿ち」とのみ言はれ（一六二頁）有名な隋の文帝の佛教治國策に言及されてゐないのは解り切つた事とは言ひながら記載する可きであらう。隋代に融合論が一世を風靡したのも（一六二頁）三教調和が修身治國の上から考察された（一七一頁）のも之が宗教政策のあらわれでなからうか。

尙出典を明記されぬ所が相當にあるのは一般人に讀むに必要なしとして省かれたのであらうが些か不便を感じる。

該書は綿密な注意を以て書かれてゐるので二三の些細事を除いては誤りを見出せぬ。が楚王英が併紀した老子は『老子と共に老子の金言を指すのであつて神格化された太上老君と趣を異にする」（六頁）とされてゐるのは疑問だ。成程太上老君とは異るが、後漢書楚王英傳を見れば彼が方士と交通して居る。當時老子が方士より神仙とされてゐた事は論衡等を見ても明かである。故に恐らく祀つた老子は神仙としての老子で五千言の老子ではない。之の事は塚本善隆氏魏晉佛教の展開（支那佛教史研究所收）を讀むと頷かされる。又理惑論は自分の能く批判する所でないが、松本文三郎博士が齊代の作品とされてゐる（東方學報京都十二ノ一、牟子理惑の述作年考）のは注目に値する。以上の諸缺點に係らず該著は三教交渉史上獨特の地位を持つ名著であり、後進を導く所大なるものがあり、著者の未開の分野を開いた功績は賞さねばならぬ。

各章の題目を列擧すれば、1佛教傳來直後における三教交渉の發端、2曹魏西晉時代における道教と佛教との交渉、3東晉時代における儒道佛三教の關係、4靈魂存滅論、5因果應報論、6沙門不敬王者論、7沙門祖服論と沙汰問題、8夷夏論、9宋未南齊時代における道佛二教の異同論、10梁魏齊代における道佛二教の角試、11廢佛事件、12隋代における儒佛道三教の關係、13唐代における道佛二教の關係、14唐代における儒佛二教の關係、15宋代における儒佛二教の關係、16宋代における道佛二教の關係、17金代李純甫の三教關係論、18元代における三教の關係、19明代における三教の關係

淺學菲才紹介するに當つて言ふ所を知らず、只妄言を弄した事をお詫します。（眞能）